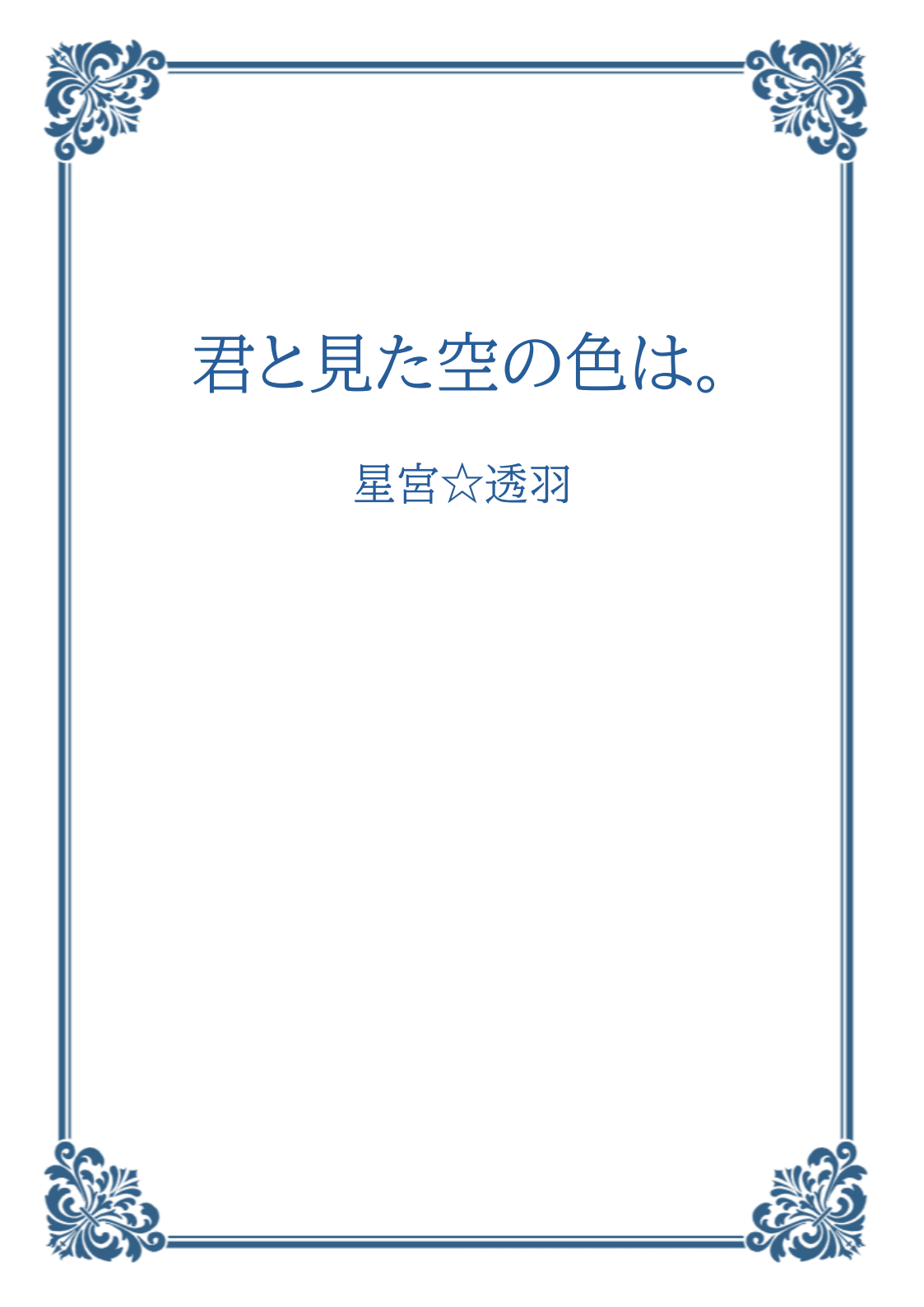




君と見た空の色は。

星宮☆透羽

たまに、あの日を鮮明に思い出すことがある。

夏の終わり、涼しい風が吹き始めた頃だった。君が隣にいた、最後の日。

あの日、私は朝から何かがおかしいと感じていた。

君の笑顔がどこか遠くに見えて、手を伸ばしても届かないような、そんな不安が胸を支配していた。でも、言葉にする勇気がなくて、ただ隣を歩く君の横顔を盗み見ることしかできなかった。

「なんか今日、変だよ」

結局、君が先に切り出した。

「え？」と聞き返したけれど、君は微笑むだけで答えなかった。

その笑顔が何かを隠しているようで、私の胸がじわりと痛んだ。

あの日の夕暮れは、空が燃えるように赤かった。私たちはいつもの河川敷を歩いていて、蝉の声が遠くで弱々しく響いていた。

君は立ち止まり、ふと空を見上げた。

「きれいだね」

何を指しているのか、君の視線を追ってもわからなかった。

ただその声が、どこか終わりを告げているようで、私は怖くなった。

「どうしたの？」

問いかける私に、君は一度だけ視線を向けて、それからまた空を見た。

「ねえ、もし、私がいなくなったら、どうする？」

突然の言葉に、私は足元が崩れるような感覚に襲われた。

「そんなこと言わないでよ」

声が震えていた。君は優しく笑って、「ごめん」とだけ言った。

何が「ごめん」なのか、聞けなかった。いや、聞きたくなかった。

その夜、君から届いた最後のメッセージには、ただ一言、「ありがとう」とだけ書かれていた。何がありがとうなのか、わからなかった。ただ、不安と恐怖が一気に押し寄せて、電話をかけても通じなかった。君の家に駆け込んでも、君の姿はどこにもなかった。

それから君がどこへ行ったのか、何を思っていたのか、私は何一つ知らないままだ。

君の家族も誰も教えてくれなかった。

君が消えてしまった事実だけが、私の胸に突き刺さっている。

毎年、あの夕暮れの季節が来るたび、君の声が耳元で蘇る。

「きれいだね」

その言葉が、あの時と同じ空の下で私を縛り付ける。

君がいなくなった世界で、私は君が残した空白に耐えきれず、何度も自分を責めた。

「もっと何か言えたはず」

「もっと気づけたはず」と。

けれど、どれだけ自分を責めても、君は戻らない。

私の手元には、君と過ごした日々の断片がいくつか残っている。

写真、手紙、君がくれた小さなプレゼント。

でも、それらは君そのものではない。

君の代わりにはならない。

それが余計に胸を締め付ける。君がいなくなってから、どれくらいの時間が経っただろう。日々は過ぎていくけれど、君のいないこの世界に慣れることはない。

どんなに時間が経っても、君の声が、笑顔が、仕草が私の中で色あせることはない。それでも、私は君に伝えたい言葉がある。

あの時、怖くて言えなかった言葉が。

君の隣にいた日々の中で、いつだっと思っていた言葉が。

「君がいないと、私は何もできない。君がいないと、私は意味を失う。」

君に会えたこと、それが私の全てだった。

君がくれた日々、それが私の支えだった。

たまに、君の夢を見ることがある。

夢の中で、君は笑っている。

いつも通りの君で、私の隣にいてくれる。

それが夢だとわかっていても、目が覚めると涙がこぼれる。

それでも、その夢が私を生かしている。

あなたは私の全てだというのに。

きみ み そら いろ
君と見た空の色は。

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 ほしみや と わ
星宮☆透羽

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

夏の終わりに起こった別
れの瞬間と、その後も心に
残る喪失の痛みを描く感動
の話。僕の最後の日に感じ
た不安と君への想いを胸
に、失われた愛と向き合
い、記憶と向き合う姿を通
じて愛の儚さと深さを描い
た、切なく儚い愛の物語。

